

Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.19 No.10 October 2018

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
悲嘆に寄り添う
／高見宇造..... 1
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち (33)
「大龍」について④
／佐藤孝則..... 2
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (22)
戦前のカナダ伝道と日系移民社会⑤
／尾上貴行..... 3
- ・ 伝道と翻訳 一受容と変容の“はざまで”一(13)
初期仏教に見る「ことば」の諸相②
／成田道広..... 4
- ・ 日本語教育と海外伝道 (3)
日本語教育で使われる教科書について①
／大内泰夫..... 5
- ・ ライシテと天理教のフランス布教 (16)
ライシテと医療①
／藤原理人..... 6
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (新連載)
第 1 回 現師と幻師をめぐる受け取り直し
／金子 昭..... 7
- ・ 遺跡からのメッセージ (39)
文化遺産を今に活かす⑦ 国営公園に変貌した平城宮跡
／桑原久男..... 8
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係論 (20)
両大戦とアフリカ人の「血税」
／森 洋明..... 9
- ・ ヴァチカン便り (34)
法王はアイルランドへ
／山口英雄..... 10
- ・ 図書紹介 (107)
『「自然」という幻想：多自然 ガーデニングによる新しい自然保護』
／堀内みどり..... 11
- ・ English Summary 12
- ・ おやさと研究所ニュース 13
第 314 回研究報告会 (八木三郎) / 第 46 回「一れつきょうだい」推進研修会で講演 (佐藤孝則) / 新連載執筆のねらい / 日台合同研究会ならびに聴き取り調査に参加 (金子昭) / 日本宗教学会第 77 回学術大会に参加・発表 (堀内みどり) / 「出前教学講座」申し込み受付 / 『天理教事典 第三版』案内 / 平成 30 年度公開教学講座 /

巻頭言

悲嘆に寄り添う

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

「平成 30 年 7 月豪雨」は、各地に甚大な被害をもたらしたが、消防庁災害対策本部の発表では死者は 221 名 (8 月 21 日現在) に及んだ。また行方不明者は 9 名となっているが、速やかに発見されることを願う。自然災害による予期せぬ死は、遺族にとって受け入れられるものではない。「もしあの時、避難勧告に従っていれば……」「たすけられなかったのは私のせいだ……」という思いから離れるのは容易でないが、一日も早くまた日常生活に戻られることを願う。

さて平成 23 年 3 月の東日本大震災では死者 1 万 5,895 人、行方不明者 2,539 人と発表されたが、7 年が経過した今、形の復興も心の復興も未だ途上である。私は今年 3 月、自教会の講話でこの点に触れた。「多くの行方不明者の家族の中には、未だどこかで生きてると信じている人もいる。例えば、津波にのみ込まれたが、何日も漂流して奇跡的にどこかの島に漂着し、今も生きている……。そう信じる遺族もいる。それは妄想だと片づけることができないのが実は遺族の気持ちだ。それがまた家族を苦しめているのではないか」と話した。7 年という時間がたったからといって震災を風化させてはいけないと問い掛けたのである。私はそれが人間だと思う。

死別の悲嘆感情が長引き、その結果抜け出ることができない方もまた大勢おられる。日本グリーフケア協会の宮林幸江会長 (自治医科大学) は日本におけるこの分野の先駆者であるが、日本人の悲嘆感情の特質の一つとして、こうした「うつ不調」を挙げているが、そうした方に寄り添うことが大切だと説いている。宮林会長は、「天理教では、死ぬことを出直しと呼び、またこの世に生まれかわってくるというわけですね。だから亡くなってもまた生まれかわってくる。そして、この世で陽気ぐらしを実現する。人が互いにたすけ合って、喜

んで生きている姿を神様も見て、ともに喜んでくださる。神と人間は、親と子の関係にあるという教えは、理解されやすいのではないのでしょうか。だから、どうぞ主張してください。『福祉のひろば』第 8 号「特集 悲しみに寄り添うグリーフケア」天理教布教部社会福祉課、2014 年) と天理の教えに今後の期待を寄せられた。

ところで、わが子を 7 か月で死産した母親が伺った「おさしづ」の一節には、「心々どうこうや治まりの理煩わし、楽しみならん中から世上治まってある。」(さ 31・7・23) とある。これは「あなたはこのように嘆き悲しんでいるのに世の中はまるで何事もなかったかのように時が流れていく。それがまた、一番辛いことであろう」と言う意味である。この「おさしづ」は的確に母親の心を表しているが、悲嘆に寄り添う者の大切な心の置き所を教えられていることに改めて驚く。言うまでもなく、「出直し」の実相は「おふでさき」で次のように教えられている。

このものを四ねんいせんにむかいとり
神がだきしめこれがしよこや (三号 109)
しんぢつにはやくかやするもよふたて
神のせきこみこれがたい一 (三号 110)
とあるように、いかなる「いのち」も親神によって「迎え取られ」、そして「抱きしめられ」、この世に「返される」のである。親神に「抱きしめられている」、その暖かさを思うところに悲嘆から抜け出る道がある。そう信じて寄り添うことである。では迎え取られた魂はどこにあるのか、親神はどばにお鎮まりになると信じらば、かんろだいを押し親神に抱きしめられている数多の「みたま」を念じて差し上げることだ。

ところで先程の「おさしづ」では、母親に対して「心を繋ぐたんのう。嬉しい働けば神は守る」と最後に言われている。これも忘れてはならない言葉である。